

しい様


## 母の足踏みミシン

「ただいま」と帰宅した私を「おかえり」と迎えてくれるのは、少し猫背でミシンに向かう母の後ろ姿と足踏みミシンがカタタタタタタタ・・・と走る音。

母は四国の貧しい家庭に生まれ、結婚して4人の幼い子どもを抱えながら通信教育で洋裁を学んだ。私や弟妹たち幼子の世話、料理洗濯などの家事をしながら合間や夜中に母がテキストを広げて勉強していたことを思い出す。型紙を取っている姿、布を広げて裁断している姿、ミシンを踏んでいる姿。4人の子どもたち皆、口をそろえて「ママって言えばいつもミシンに向かっていたよね」と言う。

私が中学一年生になった夏、自宅で念願のお店を始めた。名前は「コットンロード」。近所の海で拾ってきた流木を切って、父がペイントした手作りの看板と、手書き手刷りのチラシ。2か月に1回くらい、「井池(どぶいけ)に仕入れに行ってくるね」と言って夜中に家を出て大阪の繊維問屋街に行き、気に入った布地や手芸用品を山のように背負って夜遅く帰ってくる。買ってきた布地を私たちに見せて「次は何を作ろうか、どんなお洋服が欲しい？」と聞いてくれるのがとても楽しみだった。小さな店は近所の高校生や手芸好きなお客様が立ち寄り、また、オーダーメイドで洋服を販売し、母は忙しく生き活きとしていた。

おそらく4人の子ども達の中で私が一番たくさん母に洋服を作ってもらったのではないかな。毎年ピアノの発表会、中学校のセーラー服(!)。80年代に東京の大学に進学してからはJJ、CanCam、DCブランドを着こなす周りの女子大生に気後れしないようにと毎月のように洋服を送




ってくれた。流行のものとは一味違う「ママメイドのお洋服」は噂になり大学に着ていくたびにおしゃれな先輩から「これもお母さんが作ったの？」と言われるのがうれしく、母にすぐ電話をするととても喜んでくれた。休みに帰省するたびに毎回全身を採寸して、私だけにフィットする世界にひとつだけの洋服を作ってくれた。東京でそのままOLになると通勤や冠婚葬祭用のスーツやドレスやコート。この頃作ってもらったものは30年経った今でも大切に着ている。

ところが父曰く、「子どもたちの学費の目途がついたときにな、母さんは‘もう店やめる’とスパッとたたんでしまったんだよ。あれにはびっくりしたな」好きが高じて始めたお店なのかと思っていたが、実は生活のため、私たちの学費のために寝る間も惜しんで働き、そろばんをはじいていたのである。

その母は3年前の初秋、あつげなく旅立ってしまった。その日の朝、めずらしく私のところに電話があり、いつものように孫のこと私の体調のことを気遣い、自分と父は元気よ、じゃあまたねと話したのに。亡くなる直前帰省した際に、母が自分のワードローブの中から「これ、すごく好きなんだけど、今シーズン着たらあなたのサイズに直してあげるね」と約束してくれた。母の好きな黄色のサマーツーピース。遺品を整理していたら、ベルト芯をほどきかけたスカートとジャケットが出てきた。「ママ、私のために直してくれていたんだね。どうしていなくなってしまったの、寂しい」母が亡くなったことが急に現実のものとして感じられ、涙が止まらなかった。

踏む人がいなくなったミシンだが、コロナ禍になり父が「母さんの残した布や糸、ボタンがまだいっぱいあるから、わしも母さんの真似してミシンで何か作ってみようと思う」と言い出し、なんと、マスクを作ったのである。パソコンで型紙をダウンロードして布を裁断した立体マスクだったのには驚いた。オンラインで実家とつないで父のマスク姿を見せてもらった。父の後ろに母の足踏みミシンが映っており「カタタタタタタタ……」とあの懐かしい音が聞こえたような気がした。



私が嫁ぐときに持たせてくれた電動ミシン。母のように本格的に作ることはできないけれど、私もミシンで何かを作ることは大好き。子どもたちのベビー服、小物、七五三のスーツ…ある時調子が悪くなり修理に出したら「これはいいミシンだね、大事にきなさいよ」とお店の人に言われた。自分のミシンも好きだけど私の中でミシンと言えばやはりあの「カタタタタタタ…」と音がする母の足踏みミシンなのだ。今度いつ帰省できるかわからないが、次に実家に行ったときは私もあのミシンを走らせた。